

[特別寄稿]

こころの時代に求められる看護師教育

——臨床の立場から考える——

信 岡 研 身*

藍野学院紀要第 20 巻。光陰矢の如し、と申しますがこの 20 年間は藍野病院の歴史の半数をも占めるものです。

毎回、貴重な情報や知識を共有させて頂いており、関係者様にはこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

私自身、当院にお世話になり 21 年目。

自身の看護観も当院と学院の歴史の中で育まれてきました。

1965 年精神科病院でスタートし、精神科の看護師の育成の為、1968 年准看護学院が設立されています。

その頃からゆっくりと培われてきた「こころ」重視のケアは、現在の看護学の基盤であり、今では世間から渴望されるものとなっています。

こころに寄り添える看護師には、広い視野・感性の豊かさ、様々な価値観を認識する力、相手に不快な思いをさせない接遇、チーム構築能力、自己管理能力などがが必要です。

当学院は、上記の能力を養うことを重視したカリキュラムが考えられており、専門教養だけに捉われない幅のある教育風土を感じます。

一方世間では、精神科看護が一時期、教育カリキュラムからはずされた（正式には、他の教科に組み込まれた？）時期もありました。すぐにそれは改正され、精神看護という基礎看護学として確立されたように記憶しています。

精神・こころは、時代によって捉えられ方が違っていることは、短い私の経験からもうかがえます。

そして現在は、「こころの時代」といわれています。

学生に如何に「こころ」について学んでもらうか、臨床の立場からも大変大きな課題だと感じています。

一方で「医やすばかりでなく、慰めるために」の理念の追求が、精神看護の学びを解り易く、身近なこととして捉えられる指標になるのではとも考えています。

私は、精神看護の重要性を考えてもらうときには必ず、以下の精神科看護師としての体験を話します。

卒業したての頃、体感幻覚を執拗に訴えられる入院患者がいた。

訴えられる内容はとりとめなく、幻覚と判断したが、基本どおりに身体症状として捉え、主治医に伝え、検査も行い、胃腸薬の処方も行った。

しかし、しばらくするとまた同じ訴えが続く。

その頃の精神科看護では、「根気よく説明を行う」などの漠然とした方法が鉄則になっており、まだ卒業したての私は先頭に立って根気よく笑顔で、時には解剖書まで持参して説明をした。

初めの頃は「ありがとう」と御礼も聞かれ喜んでおられたが、毎日のように同じ説明をしていくうちに、また明日も来られるだろうな、と予想しながら関わるようになっていった。

その後、訴えは体感幻覚から私に対しての被害妄想へと変わってしまった。

険悪な形相で私を睨み、「俺の頭の中を操作している」との訴えに変わった。

かなりの興奮状態となるため、周囲の先輩から距離をとるように指導がはいった。

そのような状況の中で数ヶ月が経ち、その方は自ら

* 医療法人恒昭会 藍野病院 看護部長

命を絶たれた。

私は自信喪失の中、何度も自分の関わりを振り返った。相手の気持ちを意識して振り返ると、自殺までのところが見えてきた。

根気よく説明したことは、本人の感覚（体感幻覚）が否定されたことにつながり、分かってくれない上に、異常感は続く。何度訴えても同じ説明。他に聴いてくれるところが無い。閉鎖病棟に閉じ込められている……嘘をつかれている……実験台にされている……操作されている……あいつに……。

実際、亡くなられる前は、思考干渉や被毒妄想による拒薬が頻繁に見られていた。

この体験を「慰めるために」の視点から振り返ると、その理念に如何に反していたかがわかりました。

私の中に、どこかで体感幻覚に対して、そんなはずはないとの思いがあり、その間違いを根気よく理解してもらおうことに力を注いでいました。いつか解ってもらえるとの思いが一方通行になり、患者の思いは閉じ込められ、異常思考となって還ってきました。

良かれとの思いが、追い込む形になってしまったと考えられます。

精神看護のポイントは、「どう伝えるか」からではなく、相手の言葉や思いをこちらが「どう感じるか」からであると身に沁みた経験でした。

体感幻覚の有無ではなく、体感幻覚に悩む相手の思いに対しての自分の思いを、客観的に見ることができていない、相手の苦しみにに対して自分のところが反応していないことが問題でした。

私はこの経験を通じ、癒し・慰めるためには、まず相手のところを感じる自分の感性が何より重要であり、

精神看護の基本であると教育の場では伝えています。

また、そのような感性を育む教育風土を求めています。

以前、ゆとりのある教育カリキュラムが求められた結果が、学習能力の低下や、看護で言えば臨地実習時間の不足、実践能力低下などを招いたなどと言われています。

しかし、詰め込み教育への反省からだけではなく、この感性を育むためにも必要な対策であったはずで

その評価はあまり語られず、単位数の増加ばかりに話がいかなければと思います。

その点では、前記のとおり、当学院ではさまざまなカリキュラムを用意し、様々な視点から感性を育む教育風土が確立されようとしています。

さらに、「医やすばかりでなく、慰めるために」に関連した臨床での生の声を少しでも多くの後輩に伝えればと、そして、こころのケアの質の向上に努めていきたいと考えます。

高齢者・精神疾患・がん、当院の多くの利用者は、さらにその渴望は強く、益々精神看護教育に力を入れていかなければなりません。

こころのケアを常に看護の基盤に位置づけ、その上にさまざまな看護技術を身に付けたスペシャリストの育成に全力を尽くします。

また、どのような状況下でも、忙しさに甘えることなく、相手のところを重視し関わることのできる看護師には、支援を惜しみません。

今後、理念の視点からも教育を重ね、恒昭会病院職員・卒業生からもたくさん、藍野学院紀要に投稿し、自分たちの看護が30年、40年と歴史に残るよう、進めて参ります。